

氏名	ふじ 藤	わら 原	まなぶ 学
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)		
学位記番号	人博第166号		
学位授与の日付	平成14年9月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻		
学位論文題目	「建築的構成」について ——谷崎文学にみられる建築的事例をめぐる——		
論文調査委員	(主査) 教授 伊 從 勉	教授 宮 崎 興 二	助教授 西 垣 安 比 古
	助教授 須 田 千 里 (総合人間学部)	教授 田 中 喬 (神戸国際大)	

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、建築学での場所に対する研究に加え、谷崎文学についての研究や文芸理論の知見も援用し、文学が表現する場所が場の構成についての人間的基層を捉える手立てとなることを考察しようとするものである。具体的にいえば、人間に係る場所の「建築的構成」を谷崎潤一郎の文学作品のなかに考察することが主題である。小説における場所を考察する理由は、谷崎が小説の筋の構成に建築的な美を認めていた点と、文学作品において場所を虚構する創作とそれを論ずる次元が、未だ建てられざる建築や環境の計画過程における場所の虚構やそれを論ずる次元に通ずる存在相をもつ点にある。

序章では主題・資料・方法・目的などと共に、建築学の分野で文学作品を用いた既往研究のなかでの本論文の位置と意義を確認している。

第1章では評論『饒舌録』(昭和2年)における創作論を考察する。谷崎は、小説の「筋の面白さは、云ひ換へれば物の組み立て方、構造の面白さ、建築的の美しさである」という。この「建築的」といわれる「建築」とは、部分が全体と不可分に関わっている有機的な作品のあり方を意味している。次に、谷崎の興味は作品の「構造」を「構成」することに向けられていたから、「構成する」ことに対する谷崎の見解の推移を考察する。谷崎は作品の外にあらかじめそれを判断する基準を設けることを否定し、感覚による作品の全体把握から判断することを求めた。そしてその感覚はすぐれた作品を作り出した古人の境地を倣うことによって研かれた感覚でなければならぬという。古人の境地は作品の全体把握によって明らかになるから、感覚を研くことをめざし古人の境地を倣う為には既にして全体把握をもたらず感覚が必要とされるという循環が生じる。申請者は、作品の全体把握は作家が「構成する」(創作する)ことのなかで動的かつ円環的に成就されるしかない」と結論している。

第2章では小説『細雪』(昭和17-23年)に登場する建築の空間構成と登場人物の心理描写とが不即不離の関係にあることを論じ、作中に描かれた住宅にはそのモデルとなった住宅には無い縁側が、庭を眺める場として仮構されている点を指摘し、庭と縁側が登場する2つの場面を選び出す。ひとつは、庭に愛着を抱いてたたくで居る妹を縁側から眺めている姉を描いた場面。他方は、姉がみずから庭に居て、同じ位置にかつていた妹の姿を想起起こすことで自分も庭に愛着を持っていることを自覚する場面である。後者において想起される妹の姿は前者の場面に登場していたものであり、後者には前者が埋め込まれていることを明らかにし、ついで、小説話法上の「視点」の意匠について考察を加える。後者の場面は、語り手の非人称的な視点、庭に居る姉の視点、およびかつて縁側から妹を眺めていた姉の視点との、相異なる3つの視点が重ねられた描写となっているが、妹の心理はかつて姉がみた妹のイメージに代弁させる「側写法」という手法がとられている。その妹と同じ位置に今姉がおり、かつての妹と同じ心境にあることを示すために、話し手の超越的な視点から、かつて姉が妹をみていたイメージとその視点の名指しが必要となる。そのために縁側が創作され、そのようにして構成された空間構成が鮮やかに登場人物の心理を組み立てていると解釈する。

第3章では小説『蘆刈』（昭和7年）において、場所の設定と人物の創作とが連動していることを明らかにする。『蘆刈』執筆の動機として谷崎は舞台となる水無瀬、淀川、巨椋池への愛着を挙げているが、これらの場所の存在相はどれもが現実の相に置かれているのではなく、作中人物の〈わたし〉〈男〉〈お遊さん〉の3人の人物の醸す、次第に現実から夢幻へと移行する存在相に対応しているのである。水無瀬を散策し淀川中州へと至る〈わたし〉の目にしたがって現実の水無瀬が描かれるが、かつて文学に描かれたような場所では最早なく、一種の欠如状態にある。また〈わたし〉自身も満ち足りなさを感じており、それを満たすためにかつての〈女どものまぼろし〉を〈追ふこゝろを歌にしよう〉とする。作中の〈わたし〉は作家としての谷崎の分身のようでもあり、作中で創作を試みる姿をみせる。しかし話は〈わたし〉がめぐりあう幻のような〈男〉が語る〈お遊さん〉思慕譚として組み立てられる。つまり、淀川中州での〈わたし〉と〈男〉の対話は、創作過程にみられる推敲といった作家の自己内対話に人称の差異を与えて筋を造形したものと解釈できる。物語られた〈お遊さん〉が住む巨椋池は非時間的で地上的ではない彼岸の「物語られた場所」として創作されており、現実的に「知覚しうる場所」としての水無瀬と対比的に設定されていることが明らかとなる。夢幻と現実の場所の二層構造は、創作する作家自身が〈わたし〉として作中に造形されている自覚的創作劇の人物構成にまさに対応していると解釈できるのである。

以上のように谷崎の二つの作品と創作論を考察することによって、人物の造形と場所の設定が相即していることを本論文は確認した。虚構の話を作成する過程そのものを劇中劇という形式を用いて造形し、それを行う作家を登場させる『蘆刈』は、第1章で論じた谷崎の創作論を実作に具現した自覚的創作論小説と言える。谷崎が建築的構成と呼んだものは、このように創作過程自体の自覚構造の造形であったことが分かるのである。この過程は、例えば建築の構想制作過程における場所の設定についての自覚構造に対応するものなのである。

論文審査の結果の要旨

文学作品を建築学の研究対象に据えることは奇異に映るかもしれない。物としての建物の研究に建築学を限定して考えるかぎりは、そうである。しかし、建築が人間の場所を構成する営為であるかぎり、建築学には必然的に人間学的次元が開いている。本申請論文は、建築学のみならず文学研究をも視野に納める研究意欲によってまとめられた、本研究科の学位論文として相応しいものと認める。

文学作品の中にあつて小説は、言葉によって話の場面や環境、そしてその構成を仮構する。それは、作中人物や筋の設定と結びついた創作の対象であり、建築の概念を拡げて広義の建築的構成の実践と呼ぶことができる。谷崎潤一郎は小説の筋の構成における構造的建築的な美に芸術的な価値を認めた作家であった。申請者はこの谷崎文学を足がかりにして、小説における場の構成が、登場人物の行為や心理そしてあり方と巧みに結びつけられ組み立てられていることを、具体的な作品の読解を通して解明した。

序章において、文学作品を扱った従来の建築学における研究成果を一覧して自らの立場を確認する。文学に登場する構築物や場所の表現をリアルなものに対応した記述として処理することの多い既往研究の中にあつて、申請者は文学における場の虚構を作中人物の虚構と結びついた広義の建築的構成とみることにより、谷崎研究の水準においても作中の場所の設定を論ずる道に貢献し、建築学においても文学的な虚構の場所の創作を主題とする方法を開拓した点で、新鮮な功績と認めることができる。

第1章では、谷崎自身の創作論の開陳である『饒舌録』執筆前後の谷崎の文学論議をとりあげ、小説の組立てを建築的構成に比喩した議論の推移を明らかにした。絶えず新しい構成の美を重視する観点から次第に、創作の主体としての自覚や創作方法を論ずる観点へと谷崎の関心は移行したが、その過程で谷崎の作風に「美の極致の一定不変なもの」を認める「古典回帰」や伝統「芸」への関心が生じていることを確認した。作家が論ずる作品論が自ずから内包する制作論の比重の変化として、作品の構成美の主張の変化を捉えた論点は、第2章以下で実作に仕掛けられた構成を読解・解釈することに生かされ展開している点で評価できる。

第2章は、小説『細雪』がモデルにした住居に存在しない場所（2階縁側）が小説には架構されている創作上の意義を解明する。その場所と庭とが登場する場面では、庭にいる妹の心理を2階縁側にいて妹を眺めている姉の心理描写によって間接的に表現している。評論家によって「側写法」と呼ばれる手法である。この場面について申請者は、作中話者の視点と姉

と妹の心理描写との多層的な物語構造を谷崎が操るために作りだした創作的場所である点を、テキストの分析を通じて説得的に解明した。建築的な着眼を小説の内的な構成に結びつけて論じた点がユニークであり、小説全体の中では部分的な指摘であるが、従来の議論を進めた点が評価できる。場所の虚構についての分析は、次章で主人公の分身を虚構する方法の分析に展開する。

第3章は、小説『蘆刈』において、作家自身の分身ともみえる主人公を登場させ、創作された人物と会話させる劇中劇を設定し、実在する水無瀬と巨椋池の風景の中に話を展開させながら夢幻的な筋を組み立て上げる谷崎の構成手法を分析した点で、本論文の到達点を示している。作家の分身を作中に登場させる方法は、前章の「側写法」（三人称小説）を一人称小説に自覚的に展開した虚構の仕掛けであることを見抜いた点と、実在の水無瀬と巨椋池の対比が、作家の分身と創作された男との女性思慕の二重性（母性と遊女性）に対応しており、それが淀川の上流と下流を行き来する主人公達の動きに合わせて設定されている、巧みな実像と虚像の重ね合わせであることを指摘した点で、申請者の解釈はユニークな『蘆刈』論としての評価を得ている。また建築学的には、文学的に表現される場所の虚実の位相の解釈を風景論に展開した点が評価できる。

以上のように、第2章以下における作品の読解と創作される場所の解釈は、谷崎の広範な作品に及んでいるわけではないが、今後の発展を窺わせるに十分である。

総じて、申請論文は建築や文学に共有される場所やその構成の概念を拡大・深化させ、建築学研究と文学研究を創作論の次元で結ぶ役割を果たしている。純然たる文学研究の側からみると、十分言及できていない文学特有の語りや時制、人称の問題は今後の課題としても、それらを場の構成の観点から取りあげ解釈しえた点は、文学研究の側からも新鮮なものとして認めてよいものである。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年7月3日、論文内容とそれに関連する事項について試問を行なった結果、合格と認めた。